第八章　初詣の成立

――国民国家形成と神道儀礼の創出――

はじめに

今日、日本全国で八〇〇〇万人以上の人々が、家族そろってあるいは恋人と一年の健康と幸せを祈る初詣は、もっとも国民の身近にある神道儀礼といえよう。同様に、クリスチャンでもないのに教会で挙げる結婚式を、はるかに凌駕し、いまや結婚式の約九〇パーセント以上の形式となっている神前結婚式、あるいは子供の健康な成長を祈る七五三参りは、神道への信仰とは直接結びつかないが、国民の生活と深くかかわる重要な儀礼である。

私の問題意識は、初詣・神前結婚式・七五三参りといった国民的といえる神道儀礼が、明治後期以降、あるいは二〇世紀になって、国民国家形成とともに「創りだされた伝統」であることの検証にある。[1] 神道儀礼の中でも、とりわけここでは、近世の正月の過ごし方が近代になっていかに変容するかに留意しつつ、「初詣の成立」をテーマとしたい。

柳田国男は、『年中行事』(一九四九年三月、『柳田国男全集』一六、ちくま文庫)の中で以下のように述べている。

ただ今日いうところの何々サイという類の催しをもって、国民を統一し得られると思うようだったら、祝祭日という名称のごときは、むしろない方が害が少なかろう。これは正直なところ、明治以来の祝祭日とても同じ憾みがあった。せっかく公けの力をもって制定して渡しても、それはまだ国民多数の感覚と一致しないゆえに、知らん顔をして彼等は働いていた。（中略）正月元日というたった一つの例を除けば、都会で設け出した年中行事などは日本にはない。そうして都会で始まった生活を真似するのが、すなわち文化だと思うような考え方は、もうたいていこれからはなくなって行くだろう。

ここで柳田は、「明治以来の祝祭日」が「国民の感覚」と乖離していたとし、国民国家が上から強制する祝祭日という画一的規範を、敗戦直後に批判するとともに、正月元日の過ごし方が、近代に都市からはじまったとする。

同じ年の正月に書かれた「これからの正月」（『緑地帯』一九四九年一月、『柳田国男全集』一六）という文章の中で、元日の過ごし方について、柳田は言及する。

酒と都市生活との二つが、新しい世に入って大きなわざ（＝害――高木）をしている。たとえば元日だけは戸をしめ掃除もせず、家にこもって親子夫婦ばかり、和やかに静かに一日を送るのが、古風な正月の幸福であったと思われるのに、人が群がって住むようになると、まず早天から飛び出してやたらに訪問をする。

本来、家にこもり家族で静かに祝う正月が、近代の都市の形成とともに、外に出て訪問する正月になったとの認識である。

こうした柳田国男の認識を、歴史学から裏づけたいと思う。その際、近代の都市からはじまったとされる、外に出る正月元日の儀礼として、回礼とともに、神社へ参拝する初詣がある。そしてこの初詣の起源がどこにあるかは、矢部善三の言葉がヒントとなる。

既にして、元日早旦に、先づ上は宮中に於せられて御神事あり、その大御手振りのまにまに、全国の神社に於て神事あり、国民の習礼として元旦の神拝がなければならぬ処である。今、国民の元旦の神拝には、特に言ひなされた定式はないやうであるが、先づ氏神様の社頭に額いてから、それ〴〵尊崇の神社にお参りするやうである。此の風習は、やはり宮中に於る四方拝に起原を発して居るものらしく（『年中事物考』一九二九年、素人社書屋、傍線高木、以下同じ）

矢部がいうのは、宮中の四方拝という神道儀礼を、国家神道下の頂点である伊勢神宮から村の氏神に至る全国の神社体系において、国民の一人ひとりが、「その大御手振りのまにまに」、真似て成立するのが初詣という図式である。[2]

また正月元日が皇室と直結し特別視されることの近代の意味が、社会的に喧伝されることとして、一八九三年（明治二十六）八月に官報で告示される唱歌「一月一日」は象徴的である。[3] 小学校で子供たちが習い親しまされる、この唱歌を作詞したのは、国家神道形成過程に重要な役割を果たした出雲大社宮司千家尊福である。

一　年の始めの　例とて、
　終なき世の　めでたさを、
　松竹たてて、門ごとに
　祝う今日こそ　楽しけれ。

二　初日のひかり　明らけく、
　治まる御代の　今朝のそら、
　君がみかげに　比えつつ

仰ぎ見るこそ　尊とけれ。　（堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』岩波文庫、一九五八年）

このように四方拝をはじめとする皇室にあった正月元日の意味が、近世社会の正月の基層にいかに被さり、民衆はいかにこれをわがものとし、近代の初詣は創りだされるか、をみてゆきたい。

さまざまな地域の例をとりあげるが、特に近世以来の正月の基層をもつ代表として京都と、近代の官製の正月がピュアな形で検出できる札幌という、二つの地域に力点を置いて、明治中期以降の新聞を素材として論じたい。

第一節　近世の正月

近世の京都の町の年越しはというと、大晦日の夜、祇園社へ参る「おけら参」が有名である。卯杖（うづえ）と称する削掛けを燃やした火を縄に移して、消えないように家にもち帰り、その火で明くる元旦の竈を焚きつける。ここでは「おけら参」は、初詣ではなく、大晦日から年を越す行事であることがポイントである。そして明けて正月元旦には、毎年変わる恵方（陰陽道に定める功徳ある方位）にむかって吉方棚を設け、松竹、供物、灯火を献じて、歳徳神（としとくじん）を家の中に迎え入れたのである。(4)

一九一一年（明治四十四）十二月に風俗研究会を創設し、一九一六年（大正五）三月に『風俗研究』を創刊した京都市立美術工芸学校教諭江馬務は、一九一七年（大正六）一月五日付『京都日出新聞』で「維新前の京都の正月」（『江馬務著作集』中央公論社には未収録）を書いている。もっともいきいきと近世京都の正月を伝える文章なので、少し長いが引用したい。

大晦日は歳を守るといふので、徹夜をするのが例で、元旦寅の刻から始まる祇園の白朮参りに新火を貰ひに行く。社では当日拝殿に十二月を表する十二屯の削掛に白朮を入れて焼く。（中略）その火を火縄に受けて雑煮を煮る。年男が若水を酌む。（中略）町家では元日は戸を閉ぢて一日寝込むので、これを寝正月といつた。恵方棚を作り、にらみ鯛を竈の上に懸ける。鯛は夷の持物で赤は陽を表するからである。正月の活動は二日から始る。書初、謡初、廻礼、商始、船乗初皆二日からである。（中略）恵方参りも賑つたが、殊に鞍馬の初寅詣は景気があつた。寅の日は本尊出現の日とも、毘沙門天の縁日とも云つてゐる。

元日は家の中で静かに寝正月をし歳徳神を迎えるのに対して、うって変わって正月二日は、回礼や角倉家の高瀬川での船乗初をはじめ活動的な正月である。しかも三が日に関係なく、十二支に基づき毎年日が変わる、鞍馬の初寅詣といった近世社寺参詣の秩序が機能している。

こうした毎年変わる恵方からやってくる歳徳神を静かに迎える正月は、京都の近郊宇治にもみられた。

元日は大戸をおろして門口を閉ざし、一日中、掃除をせず、風呂も焚かず、薬も飲んではいけないといって忌みごもりした。近所隣りの挨拶は二日にはじまった。この風習は比較的近い時代まで守られ、元日から年始回りする風がはじまっても、元日はだまって名刺を置いてくるだけで、年始の客は二日から座敷に招じた。家族や同族など、身内のものだけが族長のもとに集まり、ひたすら忌み慎しんで新しい年の神を迎えて祭った古い作法を、よく残したものといえるだろう。（『宇治市史』三、一九七六年）

元日には大戸をおろして、一日中、掃除もせず風呂も焚かず薬も飲まない忌み籠りが、近来まで残っていたことが民俗の調査として記録されている。

ところ変わるが、江戸の町の商家の元旦も、戸を閉ざして屋内にて静かに休養し、東日本の農村部は正月三が日

は全村こぞって休みをとり仕事をしなかったという（宮田登『江戸の小さな神々』一九八九年、青土社）。

天保九年（一八三八）刊行の『東都歳時記』（一九七〇年、東洋文庫）には、屋内で歳徳神を迎える「年徳棚」をもうける江戸の正月元日の過ごし方を伝えるとともに、元日の「恵方参詣社」の存在も記す。恵方詣は、京都より江戸のほうが相対的に盛んであった。

農村部でも、歳徳神を迎える年神祭が中心で、正月三が日は家の中で休息する習慣もあった（田中宣一『年中行事の研究』一九九二年、桜楓社）。その一方で正月に年男が未明から神社に参詣する民俗も多くみられた。[5]『日本庶民生活史料集成』（第二三巻、一九八一年）所収の、近世における諸国の年中行事をみると、氏神詣、忌み籠り、歳徳神をむかえるなど、多様な正月のありようが近世の農村にあったことがうかがえる。象徴的には、「会津郡郷村之品々書上ケ申帳（会津風俗帳）」（貞享二年〈一六八五〉）の記載がある。

一、元朝神参始同礼の事　未明に水をあび、先づ年徳神を拝し、其より鎮守社へ参拝仕候、但し村に依て一村一同或は其村之内より五七人参候所も御座候、又は家内にて諸神を礼拝仕、神社へは不参候村も御座候

それは、村の構成員全体が鎮守社へ参拝する村から、年男のみ参拝する村、あるいは家で静かに歳徳神を迎える村まで、正月のありようは多様だったのである。

しかしながら、こうした年男の氏神詣もあったが、近世の正月元日の家族の過ごし方の基本は、神（歳徳神）は外からやって来て家で迎えるものだったのである。[6]

そして京都でいえば、初寅の鞍馬寺や初卯の賀茂神社・住吉神社といったように、百足（むかで）を使いとする毘沙門天や悪魔を追う卯杖といった民俗的な信仰世界ともクロスする、毎年変わる十二支に基づく近世社寺参詣の秩序が機能していた。いわば近代の初詣にみられるような、正月三が日、特に元日という暦の上の意味は、近世に生きる民衆

にとって相対的に意味が薄かったのである。

ところが、近世の正月元日に年中行事における格別の意味があった場所がある。それが朝廷と、武家儀礼の年賀を行なう江戸城である。この日、天皇は、清涼殿東庭で、年災消滅・五穀豊穣・宝祚長久を祈り、北斗七星・天地・東西南北・山陵を拝する(嗣永芳照編『図説・宮中行事』一九八〇年、同盟通信社)。冒頭に引用した、矢部善三の『年中事物考』(一九二九年)は、「国民の習礼として元旦の神拝(初詣)」は「やはり宮中に於る四方拝に起源を発して居る」とするが、これは当っているだろう。そこで次は、初詣の生成過程である。

第二節　維新変革と正月の変容——日記を素材にして——

維新変革による正月の変容を、二つの日記にみる。(1)

はじめは京都の町の事例である。京都の大宮通り四条下ル四条大宮町で質屋と米仲買問屋を営み、幕末には町年寄や町役をも勤めた鍵屋長治郎が幕末に詳細な日記をつけている(内田九州男編『幕末維新京都町人日記』一九八九年、清文堂出版)。その日記の正月の記載を順次繰ってみると、嘉永七年(一八五四)以降明治初年まで、正月三が日の神社への参詣の記載は、いっさいない。たとえば、幕末の平均的な正月として、安政二年(一八五五)をみる。

正月元日　乙丑、晴天。寒也、夜同断。吉書始。

二日　御奉行様御組迄出礼也。(中略)初寅也。鞍馬群衆。

十日　建仁寺丁夷子社群衆、嶋原仮宅辺見物人夥敷、夜同断。

十五日　八幡参詣夥敷。

廿日　雨天。町中、祇園社へ御千度、跡、於双林寺ニ、初参会勤ル。

元日は、自宅に籠って吉書始(書初め)するぐらいである。ただ三が日という期間に関係なく初寅に「鞍馬群衆」(正月二日条)といった記述がみられる。近世社寺参詣秩序たる初寅に、授福の神である毘沙門天に参る民衆の姿である。また十日恵美須の建仁寺や厄除詣の石清水八幡宮、そのほか祇園社やそこに隣接する双林寺といった社寺への参詣が記される。さらに安政四年(一八五七)正月九日の節分には、「御所参詣群衆也」とあり、民衆の民俗的信仰の対象としての近世天皇の姿を伝える。民衆は、禁裏の内侍所に参詣し賽銭一二文をあげて豆をもらってくるのである(飛鳥井雅道「近代天皇像の展開」岩波講座『日本通史』第一七巻、一九九四年)。

こうした正月が明治初年にいかに変容するか。

明治二年(一八六九)正月元日　大年寄へ出礼、添年寄来ル、年酒出ス。夜同断。

同月五日　京都府御用始。於新白洲祝詞申上ル、麻上下ニ而。上縁八十八歳以上之老人へ酒被下候事。

明治三年(一八七〇)正月元日　上天。六ツ過ち初礼。学校において組町年寄四ツ時ち大年寄へ出礼。祝炮多分発於練兵所。加藤殿方ニ而年酒。

同月四日　京都府御用始、祝詞。(中略)小学校書初、小供ニ祝物遣ス。

慶応四年(一八六八)八月に下京十八番組の中年寄となった鍵屋長治郎は、明治二年(一八六九)正月元日に下大組(下京)の三役である大年寄に出礼に出向く(『京都の歴史』7、一九七四年、学藝書林)。翌年の元旦になると、前年十月に下京七番組にできた小学校へ、中年寄として大年寄への出礼に赴く。小学校が正月儀式の場となる萌芽がみられ

るのである。

*

もう一つとりあげる有名な日記は、武州生麦村の名主、関口昭房（東右衛門）の日記である（横浜市教育委員会『関口日記』横浜市文化財調査報告書、横浜開港資料館編『「名主日記」が語る幕末』一九八六年）。この日記からは、明治以降、いかに官製の正月が、画一的規範として登場するかがはっきりする。関口昭房は、一八七五年（明治八）九月には第三大区四小区戸長となる東海道沿いの名望家である。

慶応二年（一八六六）正月元日辛酉晴天

二日壬戌陰天、英太郎村内ゟ鶴見迄廻札（札カ）、供秋太郎、平吉

三日癸亥雨天、七つ頃ゟ止、今朝鶴見名主権蔵同道ニ而、戸部（とべ）御奉行所年始行、今日大雨ニ付、御役所計ニ而帰宅、供秋太郎、源助方節振舞英太郎行

正月元日は家で過ごし、二日は跡取りの英太郎（昭知）が回礼、三日は名主として戸部（とべ）の奉行所に年始に出かける。こうした正月三が日の記述は、一八七三年（明治六）まで幕末と変わらない。

一八七三年には、宮中でも太陽暦が施行され、近世の年中行事の改変や外国公使の夫人同伴による参内などがはじまり、大きな変革の年となる。[8] 生麦村にも、同年十一月二十一日条に、かねて祝祭日には戸ごとに日の丸の旗を掲げよとの指示がきて、来る正月に備えて、村の所々に正月飾りの代わりに旗を立てるつもりで、昭房は旗を注文した、と日記にある（遠山茂樹『明治維新と天皇』一九九一年、岩波書店）。

翌一八七四年（明治七）正月三日の記載には、「今日元始祭ニ付鎮守社地ニ而、御神酒上ル昭知参詣」とある。

これが、正月三が日に近代宮中の年中行事と連動する、地域の神事が行なわれる記載の嚆矢である。この元始祭

は、明治三年（一八七〇）一月三日に宮中で創始され、天孫降臨の始原を祝う祭との意味づけがされた（村上重良『天皇の祭祀』一九七七年、岩波新書）。以後、元始祭は地域に定着してゆくが、元始祭が国家神道の末端を担う生麦村の鎮守社で行なわれることに注目したい。

一方、それまで関口家では正月三が日に恵方参りする記載はみられなかったが、明治十年代にはいると、

明治十二年（一八七九）正月二日　昭知村内ゟ鶴見迄年始仕舞、夫ゟ恵方大師へ参詣致し、夕刻江戸屋ニ而馳走ニ成帰宅

明治十七年（一八八四）正月一日　午後順之助大師参詣夫ヨリ神奈川へ回、夜ニ入帰宅

といったように、正月の娯楽としての恵方参りが現われる。特に、息子の順之助の一八八四年（明治十七）正月元日の川崎大師への参詣は、近世の元日の過ごし方とは対照的である。

幕末維新の正月のあいさつは回礼が基本であるが、明治二十年代になると年賀状が普及する。(9)

明治二十二年（一八八九）正月一日　伊勢龍太夫ゟ当家並田中へ宛　大麻五十五本届ク、即日夫〻へ配布ス、恭賀新年ノはがき、左ノ通発ス、辻新二君、日下部三之介、甫守謹吾、戸城伝七郎、持丸兵輔、添田知義、小野麟之助

関口日記に現われる年賀状を出した記載の嚆矢である。

また学校行事における正月三が日の意味は、明治二十年代に宮中の儀式と連動して浸透する。明治十年代までは、天長節・神嘗祭・新嘗祭などの学校暦を学区内に浸透させることが難しかったのが、一八八八年（明治二十一）正月元日の御真影を拝する新年拝賀式以降、学校行事の儀式化が進行することを、高橋敏は静岡県磐田郡の豊浜尋常小学校の校務日誌で明らかにしている（『日本民衆教育史研究』一九七八年、未来社）。関口日記でも生麦尋常小学校の

正月儀式が現われる。

明治二十六年(一八九三)正月一日　本日ノ四方拝及明後三日ノ元始祭ヲ兼、生麦学校大祭儀式執行ニ付、村長代理ニテ出席ス、十時過執行直ニ帰宅ス

そして官製の正月儀礼が国民の意識に実質的に影響を及ぼすのは、教育勅語奉読と御真影の拝礼をセットにした一八九一年(明治二十四)の小学校祝日大祭日儀式規定の施行から日露戦後にかけてであろう(有泉貞夫「明治国家と祝祭日」『歴史学研究』三四一、一九六八年)。

かくして天皇制に収斂されてくる名望家の正月として、皇室から下賜された菊の紋章の木盃で屠蘇を祝う、齢六五歳の関口昭房の正月元日は、象徴的な光景である。

明治三十二年(一八九九)正月一日　菊御紋章御木盃、是ハ昨年五月廿三日御下賜相成居候処、謹而本日之屠蘇酒祝宴ヨリ開始候

第三節　初詣の生成——京都の場合——

明治中期以降の、正月のありようの変化について、一八八五年(明治十八)四月十日創刊の『日出新聞』(一八九七年七月一日に『京都日出新聞』と改題)を素材として、京都を例に考えてゆきたい。

一八八六年(明治十九)正月元日のおけら参りの記事がある。

三十一日の夜例年祇園の火貰ひは午后の七八時比(ごろ)より翌一日の朝五時頃迄祇園社内より四条通りは通り切れぬ

程の賑はいなるに、去年は十二時比雑沓してお旅町より巡査が人力車を止むる程なりしも、一時過ぎには人足も稀となりたり、火縄の売方は昨年の半分にも及ばずといふ（「白木火」同年一月三日付）

おけら参りは、近世以来の年越しの行事であり、新年の一時過ぎには人影もまばらとなり、「初詣」がないことを示す。また時代は降り、一九〇〇年（明治三十三）の記事であるが、「元日は魔が襲ふとて門戸鎖す家多かりしも、二日は皆な曠れ〳〵しく家門開け放ちたれば人出も従つて多く」（明治三十三年〈一九〇〇〉一月五日付）とされ、近世以来の元日の忌み籠りの慣習がうかがえる。

その一方で、明治維新以来、元旦に、官が特別の意味をもたせた場は、有爵者・官吏が集う京都御苑であり、京都府庁や官公立の諸学校であった。

十九年（一八八六）一月一日　常盤なるまさきの葛かけまくも賢所の御式は去年三十一日に執行せらせられ引きつゞき本年一月一日参賀式を行はれたり（中略）在京都の有爵者同夫人文武官員勅奏任官は定めの時間より参内、宜秋門より南殿の東階に昇り御帳台を拝せられたり、当日ハ建礼。建春。宜秋の三門は陸軍歩兵が正服を着しこれを守衛し承明。日華。月華の諸門は殿丁が守衛せり、また京都府庁は例により諸官員一同参賀に昇庁せしにつき庁前は馬車人力車にてさしもに広き門前も暫時は往来を止むるくらゐなりし、その他裁判所府立公立の諸学校に於ても例によりて門松注連飾をなし、いづれも新年の飾りをなしたり（同年一月三日付）

しかしながら一八八六年（明治十九）段階では、元日の社寺詣の記事はみえない。

むしろこの頃は、近世正月の社寺参詣秩序である十日戎・初卯・初寅といった参詣が盛んであった。たとえば一八七七年（明治十）に開通した大阪―京都間鉄道の開通により、広域的な参詣が可能になるが、「京都ならびに滋賀地方より十日蛭子と住吉の初卯を兼て参詣する者の多き」（明治二十一年〈一八八八〉一月十二日付）と伝えられるし、一八

八九年(明治二十二)の「新年の景況」は、「二日は初寅に当りて鞍馬又は山科安朱の毘沙門等参詣する相場師又は貸座敷の亭主分芸妓娼妓など多く」(明治二十二年〈一八八九〉一月三日付)といった状況であった。

一八九一年(明治二十四)の京都・東京・大津の正月の景況をみても社寺詣の記載は無く、報道の比重は、回礼・衣服・新年宴会・注連飾り・初荷などの正月の風俗にあった。

恵方を知らせる記述が毎年正月元日の新聞に載るようになるのは、一八九四年(明治二十七)以降のことである。それはとりもなおさず、正月元日の恵方参りが、一般化したこととして画期的意味をもつ。

本年の恵方は北東にて丑の方に当れば加茂両大社、松ヶ崎大黒等尤も参詣者多かるべし、又本年は甲午の年なるを以て、元旦に京都及び大坂等より伏見の稲荷へ参詣する者例年に増して夥しく、同所の各人形店にては肝心の狐より馬の方を沢山併べ居れり(「恵方と稲荷」明治二十七年〈一八九四〉一月一日付)

さて正月三が日に、近代になって官により特別の意味が付加され、宮中の正月と連動した元日の祝いを国家神道は奨励した。一八九五年(明治二十八)三月に遷座祭が執り行なわれたばかりの平安神宮は、国家神道の創建神社である。

同神宮にては三ケ日間、平安講社員には大極殿に於て屠蘇を授け一般参拝者の龍尾壇に上ることを許せしが、尚ほ本日中は三ケ日同様登壇を許し屠蘇を授くる由(明治二十九年〈一八九六〉一月七日付)

さらに、一八九九年(明治三十二)の「恵方参」の記事は、家の中で歳徳神を恵方棚に迎える近世の正月から、恵方の社寺へと参詣する近代の正月への移行を示す。

本年の恵方は寅卯の方なり、されば京都の真中六角堂頂法寺よりいへば、東丸太町の熊野社、聖護院お辰稲荷、檀王(法林寺——高木)の東にある法皇稲荷、平安神宮、吉田神社等なるべし(中略)下京の人は奮発して比

表9　『京都日出新聞』一九〇〇年一月一日付

一月行事

一　日　四方拝、恵方参（申酉の間）
二　日　初荷、初風呂等、初亥参（護王神社）
三　日　元始祭、六波羅王服茶、三弘法廻
四　日　政治（事）始、飛鳥井家蹴鞠始、
五　日　初寅
六　日　小寒、年越
七　日　人日（七草粥）、門松を取る
八　日　東寺御修法
九　日　両本願寺報恩講
十　日　十日蛭子
十四日　下加茂照射神事
十五日　八幡詣（今年は御停止）
十六日　丁稚薮入
十七日　池坊生花（今明両日）
十八日　御歌会始
二十日　大寒
廿一日　初弘法
廿五日　初天神
三十日　孝明天皇祭

叡山無動寺へ参れば信心此上なし、それとも屠蘇に酔ふた人は神棚を仮に家の寅卯の方に移して拝んで置くも差支なからん、呵々（明治三十二年一月一日付）

とあり、ここには、正月三が日に、恵方にむかって社寺参りする正月が描き出される。家の中にいて恵方からの歳徳神を迎えるより、恵方の社寺を詣でる方が、御利益は得られるとの意識に変化している。しかも特定の神社が参詣の対象ではなく、住んでいる地域からみた恵方により、平安神宮、吉田神社、建仁寺摩利支天、松ケ崎大黒天と、詣でる対象は神仏さまざまである。

同日の『京都日出新聞』は、「京都の新年」として、「廻礼者は恵方詣でとして神々に詣づるも多く特に平安神宮は京都の真中六角堂より恵方に当れるを以て参詣者最も多く、盃を頂くものさへ二百余名」と、建都一一〇〇年の「創られた伝統」たる平安神宮への元日の恵方詣を伝える。

近世以来の正月の年中行事に、官製の正月がいかに被さってきたかは、一九〇〇年（明治三十三）一月一日付の記事から明瞭である。

表9に傍点を付したのは、近代になって創られた朝廷の行事と、元日に意味が特別に付与された恵方参りである。それと同時に初亥・初寅・

十日戎などの近世の社寺参詣秩序も息づいている。

明くる一九〇一年（明治三十四）一月一日付のコラムには、日清・日露戦間期の元日のあり方が象徴的に記される。[10]

たから船

○西の都も亦府庁の参賀を始め主殿寮其他夫れ夫れ出で、新年を賀し奉る議事堂も亦官民相会し

○鄙も都と異ならじ早や旧暦など云ふは稀れに、わらやの軒に閃めく御旗、図にも物したき仙郷なり

○氏神の森に詣で村長どの、御礼うけどびろくの酒も亦撃壤の楽みあり、牛の小屋にも環飾り匂ふ

○北海のアイヌ琉球の銀釵、台湾の辮髪児も今日の新禧を祝して君が代を謳はん、嗚呼東洋の日出処（ルビ・原文）

一つめは官公庁で官民会して祝う元日。二つめ、三つめは、都市、農村ともに新暦が普及したことを伝え、村の地域の氏神に村長もやってきて太平を謳歌するさま。最後は日清戦争後の日本の版図において北の北海道、南の台湾の異民族をも君が代をうたい祝わせる正月である。また同日に、十湖作「伊勢山や蓬莱山の初詣」の句も掲載される。

かくして今日につながる正月元日のステロタイプができあがる。

お早々からの廻礼者、白朮詣りの人と交代して、世は春めき渡り、大人は市議事堂へ、子供は学校に君ケ代を寿き奉りて帰れば、父子夫婦相携へての神詣で物見遊山、それ〳〵に出掛くる人は東西南北至る処に踵を接したるが中にも紀念動物園は空麗かに風静かなる日とて早朝より別項の如く入場者多く、神社にては伏見の稲荷神社、八阪神社、恵方は今宮神社、近くは白雲神社への参詣者多く（「元旦の賑ひ」明治四十年〈一九〇七〉一月三日

付）

大人は市議事堂で子供は小学校で官製の正月儀礼を行なったら、あとは「物見遊山」の一環としての神詣である。しかも「神詣」の対象である官幣大社たる伏見稲荷神社・八坂神社と、「恵方」詣の対象である今宮神社・白雲神社（京都御苑内）は、きっちり区別されている。まさに「先づ神詣でするがお正月の仕事」（「松の内の初仏参詣」明治三十九年〈一九〇六〉一月一日付）となるのである。

一九一三年（大正二）には、明治天皇の大喪後はじめての正月を迎えるが、『京都日出新聞』では「初詣」の言葉が定着している。[11]「八幡の初詣」（一月五日付）という見出しでは、石清水八幡宮へ厄除詣する群集を伝える。また、読者から応募した「私の正月」という連載では、「雑煮を祝つて御霊社へ初詣」（一月七日付）、「市電にて北野社へ初詣帰」（一月九日付）といった過ごし方が紹介される。

もはや大正期になると、恵方など関係ない。

京阪電車の広告では八幡が恵方とあるし、京電の広告では稲荷が恵方とある、大分に方角が違ふが、どちらでもエイ方に参詣したら御利益があるに相違あるまい（中略）信心の御方は京阪にも乗られませう、京電にも乗られませう八幡の八幡、伏見の稲荷、イヤどこでも差支ない御賽銭の多い方に福のさづかるのは勿論なり、地獄の沙汰でさへ金ですもの（「恵方詣」大正五年〈一九一六〉一月一日付）

この辺が、今日の初詣の原形となるだろう。留意すべきは、石清水八幡宮・伏見稲荷ともに官幣大社として国家神道の神社体系の頂点に位置し、かつ鉄道会社が盛んに恵方詣の宣伝をしていることである。同じ日の新聞に、京都電鉄は、「辰年ノ恵方ハいなりサンデス」と大書し、往復乗車券購入者には、福袋をプレゼントすると広告する。こうなってくると両神社の財政も潤ったことであろう。さらに三年後の「伏見の元旦」は、「稲荷・八幡　両神社

にては初詣の参詣人多く、京阪電車は四分毎の増発をなし、頗る雑踏を極め」るに至る（大正八年〈一九一九〉一月二日付）。

第四節　初詣の生成——札幌、ピュアな近代の表層——

一八九三年（明治二十六）一月五日付『北海道毎日新聞』。

○当区歳首の概況（前略）大晦日も農学校の自鳴鐘十二時を報すれば、明けて笑ひの門松や歳を祝の七五三飾り、新規を愛づる緑門に名札を受ける箱に盃（ハカ）、老若男女うち交ぜて、先づお極の雑煮餅に腹の鼓を打つもあり、祝酒に顔を桜色千鳥足にて拝賀の客も多く（中略）千門万戸の日章の国旗は颯（そよ）く春風に翻りぬ（中略）又た市中の景気を記さんに市中は賀客織が如く、或は人力に或は馬橇に意気揚々として春駒に打跨がるは軍人なり、第一札幌神社遥拝所に詣ずる昔気質の人に多く、恵方詣の人なきは八百万の神神ましませど神社の数の少なきゆゑか

実はこの記事が、『北海道毎日新聞』で、正月元日の札幌神社遥拝所（のちの頓宮、南二条東三丁目）への参拝を伝える初出である。若木で優美な門松は、札幌区だけで一三五六本にのぼったという（同年一月七日付）。門前の七五三飾り（注連縄）、年始の賀客を迎える名札受けの盆、はためく日章旗、といった新春の光景である。

しかしここで留意すべきは、遥拝所に詣でる人は、「昔気質」の例外的存在であり、記者は、恵方詣の人が少ない原因を北海道における神社の数の少なさに求めている。この年の、『北海道毎日新聞』の正月記事を賑わすのは、

二日の今井商店などの初売りであり、三が日を通じて報じられる大黒座の芝居、豊陽館・清明館の寄席、薄野遊廓の盛況である。

札幌の正月について、新聞記事で一番古い記述が、一八八六年(明治十九)一月十日付『函館新聞』の「札幌通信」である。(12)

十九年一月一日は旭日の国旗戸々に翻がへりしさまハ、何方も異なることもなし、午前ハ降雪なりしも午後よりハ快晴にて年賀の客四方に往復しいと賑ハひぬ、二日より三日の午前までハ快晴にて、別て二日は各商家ハ売初めの当日なれば、客は未明より押しかけ丸井印呉服店をハじめ井桁呉服店丸上小間物店等は客の山となしたり

ここには、社寺に詣でる民衆の姿は一切出てこない。それ以前の一八八〇年(明治十三)、一八八一年の、札幌ではなく函館における正月の光景をみても、回礼者、初売り、興行などはあっても、初詣の記載はない。

それどころか、「二三の書肆の店の中央に立派に飾付て価金五銭と正符付、能く見れば是れ即ち天照皇太神宮の御玉串なり」(「札幌一月の近況」『函館新聞』明治二十年〈一八八七〉一月十一日付)とあるように、伊勢神宮の玉串を頒布するという神道の宗教行為が、神社でなく本屋の手によって行なわれる、といった記事が見受けられる。

ここで明治十年代札幌の、市民の側の記録をみる。『札幌新聞』の発行人であった石川正蔵の一八七九年(明治十二)、あるいは一八八一年(明治十四)、一八八二年、一八八四年、一八八七年と残る『公私諸向日誌簿』(新札幌市史編纂室写真版所蔵)の正月の記述は、例年のごとく、自宅に年賀の客を迎えるか、年頭状を書いているか、自ら年頭の挨拶に出向くかである。唯一、神社参拝の記事がみられるのが、一八八三年(明治十六)一月四日条で、区役所へ年頭挨拶に出向き手当金五円をもらった帰りに、「夫より神社、岡口等へ年頭之事」とある。札幌神社遥拝所と岡

口宅へ廻礼していることがわかる。遥拝所への参拝は、習慣ではなくついでのことであったのだろう。

ところが、『函館新聞』(明治十八年〈一八八五〉一月十日付)の「東京新年の景況」には、「初日を拝さんと上野真乳山より各所への人出もちらほら見え、浅草、亀井戸等への恵方参りの人は山の如くいとさかんなり」と、黒山のごとく人が集う近世以来の信仰の場である浅草寺や亀戸天神への「恵方参り」を伝える。

すでに述べたように、民俗学などの文献によると、江戸の正月元日には、確かに毎年異なる方角である恵方(吉方)へと参詣する恵方参りもあったが、家にこもって、やってくる歳徳神を、家の年棚で迎えるのが基本であった。農村部でも、歳徳神を迎える年神祭が中心で、正月三が日は家の中で休息する習慣もあった。そして、これも暦によって毎年、日がかわる、初寅(芝の正伝寺)・初卯(亀戸天神)といった十二支に基づく社寺参詣の秩序が機能していた。すなわち正月元日を中心とする三が日の特別の意味は、近代のように高くはなかったのである。そうした中で近世の正月元日に特別の儀式を行なう例外は、北斗星をはじめ天神地祇に国家安泰を祈る朝廷の四方拝であり、武家儀礼の年賀を行なう江戸城であった。

したがって、一八八五年(明治十八)に『函館新聞』が伝える東京の恵方参りは、決して官幣大社ではなく、浅草寺、亀戸天神といった、近世以来の民衆の信仰に基づいた、そして毎年変わる恵方に基づいた社寺であったことに留意したい。

さらに降って、一九一一年(明治四十四)に刊行された若月紫蘭著『東京年中行事』(東洋文庫)をみると、その「一月暦」では、元日の行事として、四方拝、朝賀、初日の出、そして恵方詣、といった項目と並んで、神田明神・深川八幡・浅草観音・待乳山(まつちやま)聖天・亀戸天神・川崎大師などへの初詣が記される。したがって、東京の場合、江戸以来の恵方参りが、近代になって爆発的に拡大し、正月元日の初詣へと再編されていったと考えられる。明治維新以

降、大きな流れにおいては、家で歳徳神を迎える正月から、外に出向き神仏に詣でる正月へと転換してゆくといえるだろう。

こうしてみてゆくと、北海道、札幌の地は、近世の社寺参詣、民俗信仰といった基層がないだけに、近代の神道儀礼がもっともピュアな形で検出できる。近代に創出された神道儀礼である初詣は、札幌では明治二十年代後半に現われるのである。

『北海道毎日新聞』の一八九七年(明治三十)一月五日の記事(「元日の神社仏閣」)は、「元日には札幌神社を始め各神社寺院共参詣人非常に多かりしが、畢竟永住の基礎強固となり随つて信仰心厚きを加ひたるに依れるならんといふ」と伝える。さらに日露戦争後になると、

三十一日に歳を取つた札幌の士女は新年の吉例として除夜の鐘鳴り渡つた頃から陸続と円山村の札幌神社に参詣し鎮座まします三柱の神に第一の敬礼を捧げる、そは東京なれば恵方詣りに相掌するもので本道の守護神を斎る官幣大社の在す札幌では総ての場合を最も吉方として円山に詣るのだ、例年本社にだけ赴くもの五千人を下らず、頓宮はその倍にも達するさう(「神社詣り」『北海タイムス』大正三年〈一九一四〉一月三日付)

といったように、札幌区の郊外、円山村の官幣大社札幌神社とその頓宮(札幌区内)への初詣が、札幌の地域社会に定着するのである。

かくして、『北海タイムス』の一九三九年(昭和十四)一月一日付の記事は、

初詣で十万人突破！　これは十一州の総鎮守官幣大社札幌神社昭和十三年の記録であつて(中略)同社に於ける初詣でが一般化したのは大正期に入つてからで、明治の末四十五年度ですら参詣者円山本社一千人、札幌頓宮一万人と云ふ寂しさであつたのが、年一年と円山本社を主として隆盛の一路を辿り、神符授与所や神酒授与

所を仮設し、一方参拝者整理のため交通巡査の派出を見るに至つたのが大正十三年（後略）、と前に紹介した大正三年度の記事より円山本社への参詣人の数は少ないが、みごとに初詣の大正期における一般化を伝える。

ここで、近代に初詣が創りだされた理由を考えたい。

これは京都と同じく、つまるところ、官が上から、宮中儀礼と連動させて、正月元日に特別の意味をもたせたからといえよう。

明治五年（一八七二）正月元日の、開拓判官岩村通俊の日記には、開拓使へ「拝賀賜日晡宴」と記され、二日には、「札幌神社参詣」とある（新札幌市史編纂室、写真版所蔵）。こうした明治初年の開拓使の高官の神社参拝は、社会的な広がりはなく、近世朝廷の正月の延長に位置づくだろう。

時代が降り一八九三年（明治二十六）正月元日からは宮中の新年宴会と連動した形で、豊平館（開拓使が建てた賓客用の洋館ホテル）で官民連合新年宴会が行なわれ、道庁の高官や永山武四郎屯田兵司令長官をはじめ、「市中の紳士紳商百余名」が来会している。[13]

これが一八九六年（明治二十九）の正月元日になると、「新年拝賀式は、道庁、裁判所、郵便局、警察署、農学校、師範学校、中学校、創成学校、女子小学校其他各学校とも例に依て厳粛に式を挙げたり」となる。教育現場に、紀元節（二月十一日）・天長節（十一月三日）と並ぶ三大節として、新年節（正月元日）が、定着している。一八九一年（明治二十四）の小学校祝日大祭日儀式規定により、元日に登校することが法制化されるのである。

札幌区創成小学校から一八八九年（明治二十二）に分離した札幌女子高等小学校の『本校沿革誌』（新札幌市史編纂室、写真版所蔵）によると、一八九〇年（明治二十三）の新年式として、「一月一日午前十時職員生徒一同登校年賀式ヲ

行フ、唱歌及生徒総代ノ祝辞アリ終テ退散ス」とあり、さらに翌年からは楼上の御真影への拝賀も始まる。

こうした近代の正月元日の意義を、政府は勅令として、一九一四年(大正三)一月二十四日の「官国幣社以下神社祭祀令」において、元日を歳旦祭(中祭)として全国の神社祭祀に位置づける。

*

かつて一九一三年(大正二)五月十八日、中村純九郎北海道庁長官は、官幣大社札幌神社(戦後の北海道神宮)を頂点として全道の神職を組織する、北海道神職会第六回総会において、

現時一般移住者ヲ見ルニ誠心誠意国家ノ為メ開拓ニ従事セントテ来道スルモノハ至リテ尠ナク内地ニ於テ失敗シタル者ノ利権獲得ヲ目的トシテ来道スルモノ多キガ如シ、斯カル移住民ナレバ其種類多々ニシテ之レヲ内地人ト比スレバ寧ロ劣等ノ人々モ尠カラザルハ免レ難キ所ナリ故ニ風教改善ニ従事シ、又徳義指導ニ従事スル神職ナドハ、此点ハ見逃シ難キ所ナルベシ（中略）此敬神ノ念ヲ捕ヘ此ノ念ヲ助長セシメナバ教化ノ実ヲ挙グルニ庶幾(ちか)カランカ(『北海道神職会総会報告』)

と訓示する。内地に比して、失敗者、劣等者の多い北海道においては、「風教改善」「徳義指導」にかかわる神職者の、敬神の念を助長する役割は重要で、しかも北海道が劣っているとはいえ、異民族が雑居する植民地に比べれば北海道の方がはるかに条件が良いとの論旨へと展開する。

北海道庁の長官が、国家神道への崇敬を喚起し、神社に民衆が足を運ぶことを促していたことを思えば、今日の初詣の盛況ぶりは、なんと「敬神ノ念」が発達し、神社が身近になったことか。

『北海道新聞』一九九一年(平成三)一月四日付。

道警のまとめによると、初もうでの客は、全道約百十か所で昨年を約七万人上回る約百九十六万六千人。筆頭

は、札幌・北海道神宮で昨年を一割余り上回る約八十三万人。各地の神社も家族連れが次々と訪れ、ことし一年の幸せを願っていた。

しかしこの史料をよくみてみると、戦前に官が求めた神社の役割と、今日、札幌市民の半数近くの八三万人あまりが北海道神宮へ「一年の幸せを願って」現世利益を求め、家族や恋人たちと初詣する実態とでは、質的な乖離がある。

このことをもう一度初詣の生成をたどる中で考えて、本章全体のまとめにかえよう。

近世の正月は家の中で静かに、恵方からやってくる歳徳神を迎えるものだった。近世朝廷にあった正月元日の特別の意味が、明治二十年代に宮中の新年拝賀と連動した、官公庁への拝賀と学校教育の新年節を媒介として社会に浸透してゆく。かくして正月元日に官国幣社を中心とする神社へ出向き祈る、初詣が生成する。

さらに国民国家形成という点からすると、日露戦後の社会の変動と、近代都市の成立により、農村の年中行事から切り離され都市に流入した民衆の信仰あるいは生活文化として、画一化した初詣は定着してゆく。この初詣が都市から農村をも含む社会全般へと広まり、国民的な神道儀礼となってゆくのである。いわば、国家の宗祀、非宗教としての国家神道に照応した神道儀礼であったといえよう。その一方で、官の意図を乗り越えて、正月元日の意味を民衆は独自に捉え返し、初詣は現世利益をもたらすもの、そして何よりも娯楽として自己運動してきたといえるだろう。[14] 明治維新から半世紀近くかけて、宮中の四方拝が、新たな意味をもって都市から社会全般へと下りてくる。

(1)　イギリスを事例として、一九世紀から二〇世紀の国民国家形成とともに、国旗、国語、王室儀礼、偶像、音楽などのナショ

ナルな表象が「伝統」として創りだされることについては、E・ホブズボウム、T・レンジャー編、前川啓治・梶原景昭他訳『創られた伝統』(一九九二年、紀伊国屋書店、原著一九八三年発行)を参照のこと。

神前結婚式は、一九〇〇年(明治三十三)四月二十五日に制定された皇室婚嫁令と、同令に基づく同年五月十日の皇太子嘉仁(のちの大正天皇)と皇太子妃九条節子の結婚式によって、ヨーロッパのキリスト教と王室の結婚式との関係を念頭において創りだされた。それが細川潤次郎の『新撰婚礼式』(一八九八年)などの国民向け解説書により、社会に普及されたものである。(高木博志「初詣や神前結婚式のルーツを探る」、別冊『宝島』EX神道を知る本、一九九三年九月)

また、七五三参りも同様に明治以降に一般化した神道儀礼であることを、『明治文化史』一三、風俗編(大藤時彦執筆、一九五四年、洋々社)は指摘する。

明治以後都会で盛んになったものに、七五三がある。これは袴着・髪置などの名で江戸時代から行われ、裕福な商人などは当時からかなり贅沢な祝をしたので、禁令の出されたこともあった。しかし今のように町中で一般に七五三と称して宮詣りをすることは明治以後の流行である。髪置や袴着などは事実行っていないが、商店の売出しが吉例となって、祝をしないと肩身が狭いもののように考えるようになったのである。

(2) それは、あたかも一八世紀以前のインドの民衆にはなかった肉食忌避の習慣が、インド植民地支配下において、民衆がイギリスへの反感をいだきつつ、バラモンの習慣をまね菜食主義を選び取る、サンスクリタイゼーションによって生み出されたごとくである(小谷汪之『大地の子』一九八六年、東京大学出版会・同「牛鍋と菜食主義」『歴史学研究』五五六号、一九八六年)。

(3) 日露戦争後の地方改良運動の時期の神社関係者の発言として、「尚元旦は三大節の一にして、朝廷には斯の如く諸式厳重に執行させ給ふ、依て大日本国臣民たらん者、応分の賀を致すべき」(遠藤岳水「年中行事に就て」『神社協会雑誌』明治四十三年〈一九一〇〉五月十五日)といった、皇室に連動した、地域社会における元日の儀式の励行を神職や教育者へ説く発言がある。

(4) また貴重な京都の民俗誌を数多く残した田中緑紅は、『京のお正月』(一九六〇年、緑紅叢書)で、家で歳徳神を迎える正月元日を著している。

どちらからお正月は出て来るかと云いますと卯(東)の方角から夜があけ太陽が出るのでありますからお正月は東から来ら

れる。従つて正月の神、それは年神様とも歳徳神とも云いますがこの神をお迎えすることがお正月をする家と云うことです。また別のいい方としまして年々変りますが正月の神はその年の恵方から来られると云う見方もあります。

(5) 佐渡の年男の事例とその変容についての報告。

佐渡では年始のことを、またハルレイ(春礼)ともアザナレイ(字礼)ともいって、年男をつとめる主人とか長男がまわり、大部分の村が元日の午前中に、親類・知己・師匠、あるいは村名主・宗旨の組などをまわり、また全村家中をまわる村もあった。(中略)しかし以上のような家ごとの年始廻礼は、近年だんだん省略されて、神社とか役場などに一同が集合し、あいさつを交換する風へと移行している。(橋浦泰雄『月ごとの祭』一九七七年、ほるぷ版)

(6) 本来の近世の正月の雰囲気を伝えるものに、福岡県の「小士族」の家に明治三年(一八七〇)に生まれた堺利彦がいうような、明治初年の「一種神秘な、荘厳な」、正月の夜の思い出がある。

正月の夜は誠にゆゆしいものであった。ゆゆしいといふ古めかしい言葉でも使はないと、その気分が現はれない。私としては、清少納言あたりに真似て、『いといみじ』とでも云ひたいくらゐである。先づ神棚に幾つかの灯明があげられる。私の子供心は其の煌々たる光に射ぬかれて、底の底まで浄化されるやうな気持がした。(『堺利彦伝』一九〇五年、『堺利彦全集』第六巻、一九七〇年、法律文化社、『明治文化史』一三参照)

(7) 国立公文書館所蔵の「府県史料〈民俗・禁令〉」(『日本庶民生活史料集成』第二一巻、一九七九年)には、国家神道の画一的規範のもとで、近世の正月の民俗の何が禁じられたかが明らかとなる。旧暦、華美な門松等への禁令といったものとともに、島根県の一八七五年(明治八)の事例が紹介される。

明治八年一月七日　旧暦中正月十五日爆竹ト唱ヘ歳神ヲ祭ルヲ口実トシテ俄狂言等ノ賑ヲ為スノ慣習有之処、改暦後ニ於テモ尚其弊ヲ脱セサル部落少カラス、其事タル風俗ヲシテ猥褻ニ渉ラシムルモノアルニヨリ、第二号布達ヲ以テ之ヲ停止ス、

但之ヲ元始祭ノ日ニ換交シ氏神社頭ニ於テ執行スルモノハ苦シカラサル旨ヲ付達ス

明治八年五月十五日　人民一般国旗掲揚日ノ儀、其筋ヘ伺ノ上、自今左ノ通改正候条、此旨布達候事

新年　一月一日

元始祭　　同月三日
孝明天皇祭　　同三十日

一月七日にだされた禁令は、小正月（十五日）の俄狂言といった機知の笑いと語り芸への規制である。しかし、創出されたばかりの祝祭日である元始祭（正月三日）の日に、氏神の社頭で俄狂言を催すことは、国家神道のあるべき敬神のあり方として奨励されるのである。また五月十五日にだされた禁令では、正月元日、三日に、国旗掲揚を通じて、近代の特別の意味が付されるのである。

（8）本書第五章参照。

一八七三年（明治六）の新暦導入を契機とする正月の京都の町の民俗の変容を、文明開化の一環として捉える見方をしたものとして、『風俗画報』（一八九〇年二月十日号）所収の京都からの通信、蝶鳥舎作、「梅の春かへ唄」の「冬の春」を紹介する。

春景色。急に師走の一ィ二ゥ三ィ日四ォ日。五日暦もあら玉の。明治六の酉の年。日の撰みなく恵方さへ。万お廃止すつぱりと。頭丸めて年礼に。ヨイ洋服を着そはじめ。銘々キヤップを冠られて。門は門松飾り注連。雑煮歯固鏡餅。蓬莱などもいはふなら。鰤はまはらぬ焼物に。塩魚膳に据ゑおけバ。どんな田舎もお正月。三府諸県も一様に。ならぶフラフ（＝旗）の賑ハふて。西洋学には日々進み。万民和漢の学校建て。梅毒の根をたつ病院も。勤する身は時を得て目出度爰にすぎはひも。再びだす色里も。栄へ寿く御代の春。文明開化と仰ぐらん。

また旧暦がいかに社会に残存したかは、一八八一年（明治十四）一月四日付の『大阪朝日新聞』に、「昨（明治）十三年迄府下市中へ来る大和万歳ハ旧正月でなければ来ぬ事なりしが今（明治）十四年より新暦一月笑わしに来ました」とあり、都市部の例であるが、一八八一年（明治十四）にはじめて大阪市中で新暦に大和万歳のことほぐ正月が現出したことを伝える。

『日出新聞』で旧暦残存の記事をみると、一八八六年（明治十九）二月六日付では、「旧暦を慕ふこと甚だし」として、

徳島通信を見るに（中略）学校にて新暦にて公然十余日間も休業をなしながら旧暦の正月に当ると生徒の方より登校せぬゆゑ止を得ず再び休業せねばならず、授業上大いに妨害ありと云へり

といったものや、一八八九年（明治二十二）二月一日付、「本日は陰暦正月元日に相当するを以て大津市街の守旧家は再び雑煮餅を祝ひ餅屋は鏡餅を売り神社仏閣には点燈多く参詣人も」多い、といったもののように依然一か月後れの旧暦が社会に機能

している状況がわかる。

(9)　年賀状は、明治十年代から現われ、一八九九年(明治三十二)の暮れから年賀郵便の特別扱いが東京市内で始まり、七〇〇万通に達し、翌年全国で実施される(『東京年中行事』1、東洋文庫、一九六八年、一八頁、朝倉治彦の注)。

また回礼が煩わしいため、旅行にて不在との新聞広告まで現われる。

賀客往来の減少の郵書の増加　年々歳々新年賀客の往来漸次減少するも道理、諸新聞の広告欄内を見れば、丁度夫と反対に近県に旅行し養痾のため湯治に出掛けるもの、増加するを以ても其の概(あらまし)を推知するに足りぬべし、又夫と同じく年始回礼を略して一銭の端書を代用するものは亦増加するに至り(『日出新聞』明治二十三年〈一八九〇〉一月五日付)。

(10)　この年の伊勢神宮参拝者総数は、「伊勢山田通信(八日発)」に、「旧臘廿一日の夜より本年一月三日迄の神宮参拝者総数は五万三百八十人にして、廿一日内宮六千百廿一、外宮七千二百五十三、一日内一万一千百八十三、外宮九千九百三、二日内宮四千十一、外宮四千五百五十二、三日内宮二千九百四十九、外宮四千八人なり」と報じられる(『京都日出新聞』明治三十四年〈一九〇一〉一月十日付)。大晦日と正月三が日の参拝者のそれぞれの統計が載っている中で、元日のみ内宮の参詣者の方が外宮より多いのは、農業神を祀る外宮への近世以来の伊勢参りが未だ続く基層に、天照大神を祀る内宮の官製の正月元日の意味が被さったゆえと考えられないだろうか。

(11)　東京における「初詣」の早い用例として、「神社仏閣にも、一年最初の賽日(えんにち)には、初詣(はつまゐり)と称へて、殊に信徒の参拝夥しく、何れも群集を極む」(平出鏗二郎『東京風俗志』中巻、一九〇一年)といった記載がある。

(12)　『北海道新聞』の前身は、戦前は『北海タイムス』。その前身は、一八八七年(明治二十)の創刊以降、一九〇一年(明治三十四)迄の『北海道毎日新聞』。それより古くなると、『札幌新聞』(一八八〇～一年〈明治十三～四〉)は断片的なので、一八七八年(明治十一)創刊の『函館新聞』に札幌の通信をみるしかない。

(13)　祝祭日と地域社会とのつながりについて、天長節(天皇誕生日)の事例であるが、一八九〇年(明治二十三)のこの年をもってはじめて、札幌近郊、豊平外四か村戸長舟橋八五郎より、平岸村(現札幌市豊平区)の総代中目文平に宛てて、豊平館の宴会への招待状が届いている。

明三日、永山(武四郎北海道庁)長官ゟ近村総代人へ豊平館ニ於テ宴会ノ案内状被差出候筈ノ処、右受招待人ノ内、無尻ア

ツシ等着用候テハ不体裁ニ付、相当ノ洋服或ハ羽織袴着用、且時刻ヲ誤ラサル様（後略）（十一月二日付、『中目家資料』、新札幌市史編纂室、写真版所蔵）

豊平館では、東北・北海道地方の筒袖の着物である「むじり」や厚くて丈夫な木綿の織り物である「アッシ」といった日常の服ではなく、洋服や羽織袴を着用すべきとされる。

近世には天皇の私的な祭祀であった天皇誕生日は、一八六八年に神奈川県など開港場の祝祭として発足し、伝統社会の祭とは断ち切れた形で、町役人と村役人をとりこんで東京府などの官府の祝祭として発展してゆく（井上勝生「一八六八年の天皇誕生日の祝祭」『幕末維新政治史の研究』一九九四年、塙書房）。こうした「官府の祝祭」は、やっと明治二十年代になって、札幌において地域社会と接点をもってゆく。

(14)　官の意図を乗り越えて、民衆が運動会や博覧会を娯楽と捉え直していく側面を、吉見俊哉は、『博覧会の政治学』（一九九二年、中公新書）、「運動会という近代」（『現代思想』一九九三年七月号）、「運動会の思想――明治日本と祝祭文化――」（『思想』八四五号、一九九四年）において指摘している。

〈付記〉　本章の新聞調査に永澤亜由美氏の協力を得た。